

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	横田咲樹
2. 審査委員	主 査：連大教授（岡山大学） 高橋敏之 副主査：連大教授（鳴門教育大学） 田村隆宏 委 員：連大教授（鳴門教育大学） 久我直人 委 員：連大教授（岡山大学） 吉利宗久 委 員：連大教授（岡山大学） 片山美香
3. 論文題目	幼児造形教育における諸課題の抽出と身体内部のイメージを描画する保育実践の提案
4. 審査結果の要旨	論文提出による学位申請者 横田咲樹 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：2023年2月11日（土・祝）10時30分～10時50分 場所：岡山大学大学教育学部オンライン(Zoom)開催 1. 学位論文の構成と概要 第1章 現代社会における保育の課題と本研究の位置付け 第1節 保育の社会的重要性と課題 第2節 本研究の構成と用語の統一 第2章 造形物の構成要素「色」「形」「手触り」から抽出する幼児造形教育の課題 第1節 色の学びに関する研究動向と課題 第2節 形の学びに関する研究動向と課題 第3節 手触りの学びに関する研究動向と課題 第3章 造形教育における幼保小間の学びの連続性に関する課題の抽出 第1節 造形遊びの視点から見た幼児造形教育と小学校図画工作科教育の接続の課題 第2節 造形遊びの概念整理と課題の抽出 第4章 思考力を育成する幼児造形教育とその具現化の試論的検討 第1節 幼児期における造形的思考力への着目と造形活動を捉える視点 第2節 造形的思考力を育成する保育の具現化に向けた実践提案 第3節 保育施設4・5歳児学級の幼児が描く消化吸收排泄する自分 第4節 保育施設4・5歳児学級の幼児が描く発熱する自分 第5節 保育施設4・5歳児学級の幼児が描く嘔吐する自分 第5章 幼児造形教育における諸課題の総括と今後の展開 第1節 導出された幼児造形教育の諸課題 第2節 縦断的に連続する造形活動の学びの保障 引用文献

保育実践では、複数の出来事が同時並行で生じ、幼児は、総合的・一体的に学ぶが、学術研究や保育者が持つ知識の段階では、各論的な議論を基盤として総論を行う必要がある。つまり、各活動で引き出した学びの検討や、活動毎の幼児の発達過程が解明された上で、保育の省察を行うことが理想である。また、保育全体において、調和的で縦断的連続性のある学びを生じさせるためには、包括的な議論だけではなく、各論的な研究成果が必要である。そこで本論文は、幼児期の造形活動を議論の枠組みとし、幼児造形教育の課題の抽出を行う。具体的には、これまで焦点が当てられていなかった造形活動の特質や幼児の資質・能力を見出し、造形活動の教育効果を再検討することで、保育の質の向上を目指す。造形活動の独自性を前提とし、教育効果を検討することは、幼児の多様な経験と心身の調和的な発達に資すると考えられる。各章は、次のような内容で構成される。

第1章は、社会問題と保育の関係を示し、問題の所在と本研究の枠組みを提示する。第1節では、日本国の喫緊の課題を背景に、現代社会において求められる保育の質の確保と向上について示す。第2節では、研究の目的及び内容構成を提示する。本研究の目的は、幼児造形教育の今日的課題の抽出であり、課題の抽出は、①「色」「形」「手触り」という造形物の特質、②用語「造形遊び」に着目した幼保小間の学びの連続性、③幼児造形教育による思考力育成、という3つの観点で行う。③については、課題解決に向けた保育実践研究による試論的検討をする。

第2章では、造形教育における基本的な学習の要素である「色」「形」「手触り」に着目して、研究成果を整理する。第1節では、幼児期における色彩教育の研究動向について考察する。先行研究は、「発達」「嗜好」「教育」の範疇で分類することができるが、現在の研究成果は、単発的で現状の把握に停まり、教育の改善を目的とした研究が不足している。そこで、研究成果と今後の課題を整理しながら、色彩教育の枠組みを提示する。第2節では、幼児造形教育における形の学びについて、見立て、平面、立体の3つの視点から考察する。第3節では、用語「手触り」が指し示す意味内容を、関連研究から抽出すると共に、見出された意味内容を視点として、幼児造形教育の課題を論考する。用語「手触り」を捕捉する視点として、「感触」「素材特性の一部」「認知の基礎」が導出できる。この3点は、学びの読み取り、保育の構想、研究成果の累積における考察項目になると考えられる。

第3章は、造形教育における幼保小間の学びの連続性に関する課題を抽出するために、用語「造形遊び」に着目する。第1節では、幼児教育関係告示文と『小学校学習指導要領解説図画工作編』の記述を中心に吟味し、幼保小間の接続や連携の問題の所在を模索する。第2章では、小学校図画工作科教育における造形遊びを中心に、用語「造形遊び」に対する研究者の概念整理を行い、幼保小連携教育の課題を検討する。

第4章は、思考力の育成を観点として、課題の抽出及び保育実践の試論的な検討を行う。第1節では、思考力育成の観点から、造形活動を捉える視点を考察する。具体的には、先行研究の概観によって、造形活動に視覚や触覚による物理的な直接体験が含まれること、造形活動の過程に思考や心像（image）の具現化があることを見出す。また、幼児造形教育に不足している観点を論考する。第2節では、造形的思考力を育成する保育の具現化に向けた試行的考察と、第3～5節の実践研究の手順及び概要を説明する。実証データの収集のために行った保育実践は、「発熱する自分」「腹痛時の自分」「消化吸收排泄する自分」「嘔吐する自分」「運動直後の自分」（順番は、実践を行った順）を主題とした描画活動であり、保育施設4・5歳児学級を対象としている。第3節では「消化吸收排泄する自分」、第4節では「発熱する自分」、第5節では「嘔吐する自分」を考察対象とする。また幼児は、知識や経験や身体感覚を基に、想像した身体内部を描画表現できることを明らかにする。さらに、幼児期の造形教育は、表現の楽しさや面白さを味わうことだけではなく、思考力の育成という観点からも、保育実践や学術研究を推進する必要性を示す。

第5章は、第2～4章の研究成果を纏め、各章各節の結果を総括すると共に、幼児造形教育を捉える新しい視点として、造形的思考力の構造のイメージを提言する。先ず、第2～4章において見出された課題の共通点として、研究数の少なさと研究成果の拡散があることを述べる。第2節では、幼児造形教育における用語の整理と学術用語の確立の必要性や、保育の横断的連続性と縦断的連続性について言及する。また、各節で明らかになった課題や、再確認された造形活動の特質を背景に、本論で考察した範囲で、造形教育における思考力育成のイメージを示す。さらに、造形活動は、思考力と表現力の両側面から捉え、実践する必要があることを考察する。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、7編の審査制全国学術雑誌の査読付き論文として『美術教育学研究』（大学美術教育学会 2020・2021・2022）、『日本幼少児健康教育学会誌』（日本幼少児健康教育学会 2022）、『日本美術教育研究論集 2022』『日本美術教育研究論集 2023』（日本美術教育連合 2022・2023 予定）、『美術教育学』（美術科教育学会 2023 予定）に共著論文の第一著者として掲載又は掲載決定・印刷中である。これらの研究成果の審査を含め、5名の審査委員は、以下の点について討議した。

(1)研究目的と論文構成の整合性について

本論文の目的は、幼児期の造形活動の教育的意義を再検討することである。考察においては、「基本的な学習の要素である造形活動の特質（色、形、手触り）」「幼保小間の学びの連続性という長年の教育課題」「重要でありながら研究の推進が不十分な思考力の育成」の3つの視点で行われた。その結果、各視点における課題が明らかになり、今後求められる教育実践や学術研究の在り方が、展望されている。以上のことから、研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

(2)先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

本論文は、保育の質の向上に寄与する学術研究と言える。先行研究の概観では、色、形、手触り、造形遊び、思考力に言及した幼児造形教育の主要な研究資料を網羅している。その結果、各視点で研究成果が拡散していることが明らかになり、研究課題が見出された。保育実践データの分析と考察からは、幼児が発揮できる造形的思考力が示され、幼児造形教育の発展に寄与する考察が行われた。以上のことから、研究資料の質・量及び扱い方共に学位論文の水準にあると判断できる。

(3)分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

本論文における先行研究の概観は、中立的かつ冷静で、丁寧に行われており、論理的な文章表現への配慮が認められる。保育実践研究におけるデータの分析では、専門や経歴が異なる教員の協力を得ながら、客観的な分析に努め、分かり易く纏められている。また考察においては、適切な項目が立てられ、恣意的な論述を排除して論考を進めている。論の構築と展開は明快であり、先行研究や関連領域の知見及び保育実践データの分析結果を基に、納得のいく合理的な結論を導いている。

(4)教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

本論文の独創性及び発展性は、第1に、頻繁に使用される「色、形、手触り」や「造形遊び」という用語に対して、十分な考察がされていない現状への着目である。第2に、研究の推進が停滞している造形的思考力という観点から、挑戦的な実践研究を行った点である。総合的な学びや調和的な発達が求められる保育では、各活動の独自性を深く考察することが難しい。視点を設けて課題を抽出し、造形活動の教育的意義を再検討した本論文は、教育実践学における価値が高いと言える。

(5)学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

幼児教育・保育に不可欠である総合的な体験や心身の調和的な発達は、各活動の教育的意義を体系的・縦断的に認識した上で具現化すると考えられる。幼児期の造形活動に期待されるのは、「表現の面白さや楽しさを味わう」ことが主体であるが、本論文では、身体内部への知覚と表出や造形的思考力の育成等の新しい考え方が見出された。幼児造形教育の発展性が示された点で学校教育実践に貢献する研究成果と認められ、学校教育学の推進と方法の確立に寄与する論文であると言える。

3. 審査結果

以上により本審査委員会は、横田咲樹の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。